

この一年を振り返って

真 善 美 愛

平成2年度会長 千川 純一

4年前に誕生した放射光学会はベンチャービジネスです。新しいことをやる研究もベンチャービジネスではないでしょうか。日本経済新聞(平成3年3月3日、日曜日)の「丁々発止」のページに、京セラ、第二電々などを創業された稲盛和夫氏と経済小説家の城山三郎氏の対談「ベンチャー精神どこへ」が連載されていました。「ビジネス」を「研究」に、「経営者」を「研究指導者」に置き換えて読んでみると、とても面白く有益でした。

ベンチャービジネスの成否は経営者の能力に大きく依存しており、城山三郎氏によると、探検家、戦士、判事、芸術家の四つの性格を兼ね備えているのが経営者の理想像で、二人の経営者のコンビで成功した例も多いようです。

探検家が追究するものは「真理」であり、戦士は悪と戦い「善」を実行するもので、芸術家はもちろん「美」を追究し、物事を裁くにあたっての判事の心は「愛」が基本と言えましょう。つまり四つの性格のここは真、善、美、愛なのではないでしょうか。

会長は学会の経営責任者ですが、私はこの四つの性格のどれも欠落していて失格です。でも、五人の幹事の方々は、これらの性格をそなえておられ、何とか一年間の任期を終わることができました。そこで幹事の皆さんの特に優れたご性格を記して御礼を申し上げたいと存じます。

「探検家」の役を果たして下さったのは行事幹事の水木さんです。特別シンポジウム「小型光源の出番は？」では、「明日のリソグラフィは放射光なしでやってみせる」と自信満々の講師もお招きし、野心的な企画をして下さいました。「戦士」は、これはどなたも賛成していただけると思うのですが、渉外幹事の柿崎さんです。学術会議の委員候補者の推薦団体になるためには、学会として5年間以上の実績が必要ですが、ご尽力でそれを達成して下さいました。大嶋編集委員長はお酒を愛し、学問を愛しという「芸術家」タイプで、会誌の充実に情熱をそそがれ、会誌「放射光」はすばらしいという評判を獲得されました。庶務幹事の大隅さんと会計幹事の平井さんは、私は自信をもって「判事」であったと言い切れます。大隅さんは国際会議などの主催、共催の内規を作り、また若手会員、学生会員を優待するため定款の変更をして下さり、平井さんは会計が赤字になることを心配され、委員会旅費の支給についてきめ細かいご配慮をして下さいました。ご両人の心は正に「愛」でした。真善美とよくいわれますが、お二人のお働きから愛は欠かせないことを学ばせていただきました。

でも、本学会の特殊性を考えますと、学会経営は真善美愛などとロマンチックなことは言っておれません。他の学会とは異なり、将来計画を立て放射光源を実現していかなばなりません。それには、まず会員数で本学会の重要性を示し、放射光科学の出現の意義、存在感を世の中に訴えていくことが大切です。大勢の人が放射光というミコシをかつぎ学会活動が大きく展開していく必要があります。

そのためには活動資金が必要となりますが、現在の学会財政は貧弱で会誌を出版していくことで精一杯

という状況です。会誌の出版費は会費収入と広告料とで賄えず、企業からの賛助会費でおぎなっています。

財政基盤を確立するにはまず、会員を増やすことが最も効果的です。現在、放射光に関係のある方は、ユーザー、加速器研究者を問わず、全部入会していただきたいと存じます。

10年ほど前のことですが、ある半導体企業の技術担当の重役が「電気通信やコンピューターで生きている企業なのに社員の技術研究者は電子通信学会に入っていないのが多いのはどうしたことか」となげかれていました。その後、この会社では電子通信学会に入会していないのは恥といった雰囲気になったそうです。本学会の場合は、会費は会誌の購入代金ではなく、放射光利用のより良い環境作りを目指す将来計画を推進するための寄付という大きな「善」を考えていただけないでしょうか。基礎研究ただ乗り論のように、「放射光利用も…」と私は言いたいのですが、お叱りを受けるでしょうか。

健全財政へのもう一つの方策は、現在、研究会や講習会を独立採算で開催していますが、これは学会の重要な事業として、ベニスの商人シャイロックのようにガメつく稼ぐことです。研究会、講習会の参加者に安い参加費で奉仕するのは大切なことですが、これは「小さな親切」、大きく稼いでそれを資金に大活動をし、放射光科学の育成に寄与する大きな「愛」を考えた方が良くと思うからです。実際、研究会などの参加費で健全財政をきずき、活発な活動をつづけている応用物理学会結晶工学分科会の例もあります。

会長に就任の折り私は「三代目は学会をつぶさないようにする役目」と挨拶しました。三代目でお家をつぶしたので有名なのが、怒りをおさえきれなかった浅野内匠頭です。お家は断絶しましたが、その名は末代になったのですから「つぶす」もまた可なりで、より大きな「美」を獲得できたのではないのでしょうか。その意味では三代目は、大きな借金を作り会員の皆様だけでなく、放射光科学に関連する大勢の方々に危機感をもっていただき、防衛に協力一致してあたるという和合の「美」を築くのもよかったのではないかと反省しております。次期執行部は会員増にご尽力下さるそうですが、採算を無視した大いなる「探検」もお願いしたいと存じます。破産しても初代と二代目の会長は必ず財政立て直しに乗り出していただけること請け合いですから、心配はいりません。

学会への入会にしても、講習会の運営にしても、あるいは、将来計画の「まとめ」や推進にあたって、各人それぞれ理屈があることですが、願わくばより大きくて、より深い真善美愛を追究することでありたいと思う次第です。放射光学会は真善美愛のベンチャー精神で、ますます発展しますよう願っております。

最後になりましたが、平成元年度会長、佐々木泰三先生にはいろいろご指導をいただき、アイオニクスの西野さん、大森さんは献身的に尽くして下さいました。心から厚く御礼申し上げます。

編集幹事この一年

筑波大学物理工学系 大嶋建一

高エ研の宮原さんの後任として編集幹事を引き受けまして1年間過ぎました。

2ヶ月ごとの幹事会、3ヶ月ごとの編集委員会、さらには評議員会への出席で、会議が多かった感じです。これらを通じて学会の発展には何が必要かを考えることが時々ありました。その中で会誌は年会と同様に学会の大きな柱になっていることを認識しました。

皆様に年4回定期的に会誌が届くまでにはいろいろと手間がかかります。編集委員会ではまず委員から推薦のありましたテーマおよび執筆者を検討します。そして、依頼することになりましたら、掲載予定号を決め委員および事務局から原稿依頼をしています。時が過ぎ締切予定日が近づきますと、事務局から執筆者に対して提出期日の確認がなされます。しかし、期日を過ぎても原稿が事務局へ届かない場合には困っています。執筆者が研究・教育に多忙なことは十分判っていますので、なるべく次号に廻すことにしています。でもこの様なケースが増えますと会誌の定期的発行が崩れてしまいます。とにかく記事が集まると、活字が組まれ事務局および著者の校正、さらにレイアウトの検討と続き最後に印刷され、発送となります。これからも会員の方へ原稿の執筆者依頼があると思いますので、提出期日を守って下さる様お願いします。

さて、平成2年度では会誌の編集に関していろいろな試みを行いました。その1として誌面の2色刷です。商業誌(例えばパリティ)や大規模な会誌(例えば日本物理学会誌)にはとても及びま

せんが、記事にポイントをつけたために見やすさを増したことと思います。その2としては記事の最後にキーワードを加えたことです。本学会は非常に幅の広い分野の方が会員ですので、技術的用語がお互いに理解しあえないことがあります。そのため、重要な言葉を2~3取り上げ、説明していただいています。将来、これらをまとめて放射光用語集でもできればと望んでいます。第3としては実験室、研究会報告等の記事に対して委員が随時執筆を依頼していることです。このために、よりホットな話題を早く掲載することが可能になりました。さらには、Vol. 3, No. 3では大型放射光実験施設建設に関する特別委員会報告書が、またVol. 4, No. 1では学会設立特別座談会の6回目として第一線で活躍中の女性の研究者に集まっていたいただき、研究者に占める女性の割合が極端に低い現状をいかに改善するかについて議論しました記事が掲載されています。そう考えますと女性の編集委員がいませんでしたのでICUの高倉さんに今年始めから加わっていただきました。

まだ発足して丸3年しか経過していない本学会の会誌の性格はまだ定まっていませんが、時代に合った新鮮な内容の記事を早くとり上げていくことが重要な点だと思っています。この一年間無事会誌を発行出来たのは記事を書いて下さった方々、熱心に内容を議論して下さった編集委員の方々さらには事務局の西野さんの並々ならぬお力添えによるものです。どうもありがとうございます。

渉外幹事この一年

東京大学物性研究所 柿崎明人

日本放射光学会が生まれてすでに三年が過ぎた。光源加速器を含む放射光科学・技術に携わる人々のコミュニティとしてこの学会は誕生した。渉外担当の仕事は、学会が単なるユーザーコミュニティではなく、放射光といういわば一つの道具を中心に集った多様な研究者、技術者集団の間の学術的情報交換を円滑に行えるようにすること、国内外の分野を同じくする学協会との連携を強めること、専門分野外の団体と接触する窓口となることなどなどである。この一年間、第三期幹事としての私のやるべきことは前任者の敷いてくれたレールの上を走ることと、いくつかの新しいレールを敷くことであった。いま振り返ってみると反省しなければならないことの多いのに気が付く。

確かに幸先はよかった。4月の年会で、Synchrotron Radiation News (SRN) のEditorであるSusan Lora嬢に会い、本学会のいろいろなニュースをSRNに提供すると同時に、SRNを学会の会員全員に無料で送ってもらえることになったのである。彼女は、思わずカシオの電子時計をプレゼントしてしまった(私ではない)程の美人である。しかし、その後何ヶ月かして、多くの会員の方々からSRNが送られてこないという苦情をいただいた。Business is businessでやらなければいけなかったのだ。再度、全会員に送付してくれるように約束はしていただいているのだが、もし送られていない会員の方がいたらお知らせいただきたい。

二番目は、学会を日本学術会議の学術研究団体として登録することであった。これはすでに佐々木会長の時代から考えられていたことで、発足し

て三年に満たない学会が登録されるかどうか心配ではあった。しかし、千川会長、佐々木先生、それに前幹事の藤井先生らのご助力のおかげで首尾よく登録された。本学会は日本学術会議第4部会物理学研究連絡委員会に属することになった。ところで、登録されると、学術会議に学会から会員を推薦することができるのであるが、準備不足と締切りまでに時間が短かかったために、今期に限って変則的なことになってしまった。他学協会同様に会員候補者の選考規定を作るなどしていかなければいけないが、これは来期で行うべき宿題である。

渉外の仕事の一つに学術的会合の後援、協賛を受けたり、依頼したりする仕事がある。これまでも数多くの会議、シンポジウム、セミナー、などへの後援、協賛依頼があり、その都度、渉外委員会内規に照らして諾否を決定していた。放射光の関与する分野は多岐にわたり、後援、協賛などの依頼件数も年毎に増えている。このこと自身は学会がその存在の有用性を認められていることの証拠なのだが、一方では学会設立時には考えていなかった様々なケースも生まれてきている。実際、渉外委員会の内規では適応できない場合もあった。学会がしだいに年を重ねていく中で、当初考えていたことの見なおしと整備をしていかなければいけないだろうと思う。

私にとってこの一年、渉外幹事として、いろいろ勉強させられるところが多かった。とくに、学会が一人立ちしていくさ中にいろいろなことがやれたのは良かったと思っている。ご協力いただいた会員の皆様にお礼を申し上げます。

庶務幹事この一年

高エネルギー物理学研究所 大隅一政

学会創立からの2年間で、歴代の会長をはじめとする経験豊かな執行部・評議員各位のご尽力並びに会員各位の積極的な参加、事務局の西野さん大森さんの献身的な協力によって、学会の定常的な活動についてはほぼ軌道に乗ったように感じておりました。創立3年目にあたる平成2年度には新たに会長に千川先生が選出され、庶務幹事に私が指名されまして、私も微力ながらこの一年間会の活動に係わってまいりました。私が庶務幹事をお引き受けしたのは、本会も順調に運営され、且つ新会長は高エ研・放射光実験施設長という激務にあって、とても学会の活動に力を尽くす余力は無いものと半ば安心できる状況であると判断できたからであります。ところが、先生は昨年度の総会でも言っておられましたが、常々「三代目は・・・」と口にされてはいますが、実際には放射光実験施設長の三代目としてその発展に大いに力を発揮されておりました。ここでしっかり気付いておかなければならなかったのであります。会長は“無い筈の力”を更に3年目を迎えた本会に投入しようとしていたのであります。このことは千川会長が3代目の会長として5月初旬に高エ研・放射光施設長室で開かれた平成2年度第1回幹事会で抱負を述べられるまで知る由もありませんでした。初めからアルコールを手にしながらの幹事会で会長が述べたことは、先ず1) 前年度からの引継ぎとして会員増、特に若手・学生の会員を増やすこと、2) 加速器関係の会員に彼等自身の研究の向上に繋がる活動の場を造ること。3) 日本放射光学会は放射光科学として唯一の学会であるか

ら国際的な交流を推進すること、4) これまで以上に周辺の放射光利用者に積極的にアプローチして彼等にとって魅力的な会とすること等であります。そしてこれらについて具体的な提案がありましたが、それらの中で実現していないものは、即ち皆様方の御存知ないことと言えば、例えばSRI-91に前後してLURE (仏) との共催で「陽電子利用による放射光の安定性についてのシンポジウム」開催、あるいは1992年夏に開催の「第4回生物物理と放射光国際会議 (BSR92)」と関連して学会誌に特集を組むといったことでした。皆様も御存知の本年1月末に初めての本会主催として行われた2件の特別シンポジウムも上に述べた目標の実現として開催されたものであります。このシンポジウムはソ連・米国等から多くの研究者が参加して盛会の裡に開催されました。また、国際的な繋がりという点では第7回XAFS国際会議の本会に対する主催依頼を契機として、本会主催の国際会議の開催に関するガイドライン作りが幹事会・評議員会で行われました。これは他の共催・後援・協賛の扱いと共に次期執行部で規約として纏められることになるでしょう。

この様に本会独自の活動の可能性を広げるためのルール作りと共に、本会も3年目を迎えて外部との関係も徐々に緊密なものとなってきており、学術会議を初めとして周辺諸団体に対する対応のためのルール作りが必要な時期になってきております。本会は創立3年目ではありますが、会員の年齢が3才というわけではなく経験豊かな方ばかりですので、早い機会にこれらに対するルールが

整備されることと思われま。このように本会が高い水準で定常状態に達するには未だ々やらねばならないことが山積しております。…etc. etc…と。言うことで、私が当初楽観していたことは全くの誤りであったことに気が付いたのは丁度1年前ということになります。とは言っても「庶務の役目

は全てが順調に推移していれば特に大変な仕事ではない筈」と勝手に思っていたことは間違いではなかったようです。会長はじめ幹事の皆さん有難うございました、そしてお疲れ様でした。次期の方々よろしくお願い致します。

会計幹事この一年

(株)日立製作所基礎研究所 平井康晴

いつも桜の花を見る度に、1年前の風景をあれこれと辿り、光陰矢の如しと思う訳ですが、会計幹事を終えた今、楽しく仕事が出来たことを感謝しますと同時に、お金も矢の如し、羽が生えていたとつくづく思います。

千川前会長に、学会の会計業務の基盤を作られた菅滋正さん(阪大)の後任を仰せつかった時、考えた事は次の二点でした。

- (1) 前年度と同様、年度末決算には黒字(収支差益)を出す。
- (2) 収入が増す仕掛けを作り、剰余金を増やす。

言ってみればあたり前の事ですが、しかし、若輩者の私にとって、言うは易く行なうはなかなか難しでした。結果を先に述べますと、(1)はなんとかクリアしたけれども(～100万円)、(2)は今後の課題と言う訳であります。これだけでは具体的内容を理解して頂けないと思いますので、学会の懐具合を示し、課題の中身を述べたいと思います。

'90年度の予算は、約1,300万円、決算は約1,400万円でした。明細は本誌「会告」に掲載されていますが、決算上の主な収入科目は次の四つです(カッコ内は予算)。金額は四捨五入してあります。

(1) 正会員会費：440 (460) 万円、(2) 賛助会員会費：400 (370) 万円、(3) 学会誌広告料：410 (410) 万円、(4) 学会誌販売収入：120 (30) 万円、

また主な支出科目は次の四つです(カッコ内は予算)。

(5) 学会誌出版費：650 (760) 万円、(6) 事務経費：260 (240) 万円、(7) 会議費：240 (120) 万円、(8) 通信費：100 (120) 万円。

収入は、(1) - (3) の三本柱で成り立っています。さて、(4) 学会誌販売収入が予算を大幅に上回りました。増加分は、千川前会長の発案で、将来計画特別委員会が纏めた大型放射光施設利用計画に関する報告書を有料頒布して得た収入です。また、(1) 正会員会費は会費未回収分が有るため予算を割りました(予算作成時に予測した会

員数は770名、年度末実数764名です。会員増のための施策は千川前会長を中心に練られて来ています。

つぎに、支出は、(5)学会誌出版費が全支出額の半分以上を占めました。ただし、印刷費の圧縮等で支出は抑えました(個人会員年会費は会誌一年分の費用を下回る)。一方、(7)会議費が予算の二倍に達しました。上半期で一年分の予算を越え、決算で赤字必至と考えられたため、旅費の半額支給や、有料会議室の利用を控える事などを提案せざるを得ず委員の方々に御迷惑をおかけしました。(4)の収入増加は会議費パンクの対策でした。

さて、今後の課題と考えられる事項を記してこの小文を終えたいと思います。それは、

- (1) イベント(国際・国内会議、講演会、研究会)開催等に備えた初動資金を蓄積する(～500万円は必要)。そのために、学会誌広告料、委員会報告書有料頒布等による収入を増やすと共に、新しい収入源の柱を開拓する。
 - (2) 支出を抑える。例えば、2年に1回無料配布の会員名簿を3～5年毎とし、それ以外の年の発行希望に対しては有料配布とする。
- 最後に、学会事務局の方々の御協力に感謝したいと思います。

行事幹事この一年

日本電気(株)基礎研究所 水木純一郎

初代幹事の下村さんから気軽に受け継いであっという間に一年が過ぎてしまった。最後の幹事会が3月に行われ、その時に一年を振り返って何でも言いたいことをとすることでこの欄が設けられた次第である。感じたことを思うままに(遠慮せずに)くだらなく書き並べるのでお許し願いたい。

I. 何を計画するにもお金が無い。

今年4才になる生れたばかりの若い学会であるので仕方が無いかもしれないが、催し物を計画するときに非常に悩む点である。毎年、年会、シンポジウム、講習会等を主催しているが、ほとんど

お金は余らない。去年のシンポジウムのように少し企画を大きくすると資金に関して終わるまで冷や冷やしななければならない。しかも、いつも同じ企業からの寄付に頼っている次第である。これではやがてそっぽを向かれかねない。積極的に資金を増やすことを考えるべきである。今年度幹事である東大 石川氏はこの点に関して考えておられるようなので会員の方々の御協力をお願いしたい。

II. 学会員を平等に。

これまで学会主催の催し物への参加費は、大学、官公庁に勤める会員と民間企業に勤める会員

とで大きな隔たりがあり、しかも後者会員の参加費は前者に勤める非会員のそれよりも高かった。私自身、民間企業に勤めているので言いにくいではあるが、やはりこれはおかしい。I. で述べた事情があるので心情的には解るが、ここはやはり、学会主催の場合は、会員の参加費は同じにすべきだと思う。去年のシンポジウムではこの差を付けなかったのであるが、今後とも続けてもらいたい。

Ⅲ. 年間を通じてコンスタントな催し物を計画したい。

シンポジウム、講習会は年度後半に集中してしまう。理由は簡単で、4月に行事幹事、委員が新しくなり、それから計画が立てられるからである。初めから各々の任期を二年と決め、一年ごとに半分の委員が変わる等色々な解決策が考えられるので早急に実行してみてもと考える。

Ⅳ. 他の学会が主催する催し物、特に年会との差別化をどの様にするか？

毎年、年会での発表者が少なく、締切後再度募集をして（電話等で頼む）数を集めている次第で

ある。放射光学会のみに入会している会員は少なく、ほとんどの会員はサブ学会として本学会を位置付けているかも知れない。しかし、世界に例を見ない特殊な学会であることは間違いないので、放射光学会ならではの発表内容、発表形式を考えて行くべきかもしれない。PFシンポジウムとの関係もあり、今後どうして行くべきか多くの会員の意見を聞いて実行していかなければならないと思う。

あっという間に一年が過ぎ、気が付いたら一つのシンポジウムしか実行することができなかった。去年総会の席で公言したことが実行できず、公約違反である。政治家ならまだしも、一学会員として申し訳なく思う。御容赦願いたい。

なお、この紙面をお借りして去年一年間実行委員として働いて頂いた方々をご紹介し、彼等に感謝申し上げたい。

磯山悟朗(分子研)、和泉義信(山形大)、伊藤健二(高エネ研)、小宮聡(富士通)、高橋隆(東北大)、田村剛三郎(広島大)、前沢秀樹(高エネ研)、前山智(NTT)、八木健彦(物性研)(敬称略)